

13 時頃：鹿島・福祉サービスセンター訪問

- ・炊き出しの現場（鹿島・福祉サービスセンター）に到着。
 - ・東京からの炊き出しを福島市からのボランティアが助けている。
 - ・すでに避難されている人たちへの配布は終了し、ボランティアが食事をしている。
- 炊き出しは、牛丼、親子丼、カレー、サラダ、フランクフルトなど、数も多い。
- ・避難所になっている福祉サービスセンターの2カ所あるうちの1カ所を見せてもらう。
 - ・靴は脱ぐようになっている。
 - ・職員が24時間で管理している。
 - ・福祉サービスセンターのため、床も暖房があり、あまり寒さを感じない。
 - ・とても管理が行き届いた感じで、情報も玄関にはってある。
 - ・仕切りがあり、落ち着いた雰囲気がする。
- ・食事は併設した調理室で調理しているとのこと。



14 時頃：原町地区

・原町地区に向かう。途中津波の被害を見て回る。浜辺で、もしここで地震が起これ、津波が起きると避難することができないことを実感。大きなコンクリートの建物は近くになく、高台もない。



15 時頃：原町地区・原町第1小学校訪問

- ・2つめの避難所（原町地区・原町第1小学校）を訪問。
- ・体育館が避難所になっている。3食お弁当がでる。お風呂は週3回、ハートランドに行く（バスで送迎）。
- ・かなり人が減ってきたのでゆったりした感じがする。ちょうど東京のボランティアが珈琲と紅茶をサービスしていた。籠作りも行われていた。ベッドが隠れるぐらいのパーティションがある。整然とした感じ。
- ・(30代ぐらいの男性より)
 - 1人で避難。病気があり、ここだと薬や医療の心配がない。あまり困ったことはない。
- ・(30代から40代ぐらいの足が不自由な女性とその介護をしている母)
 - 小高から避難。1ヶ月ぐらいここにいるが、ずっと車いすで寝ていた。最近ベッドが入り楽になった。ただ、トイレの介護が大変で、簡易便器があればいいが、ここでは使えないのが大変。仮設に入れれば、介護が楽になる。
- ・(60代ぐらいの女性)
 - 小高から避難。津波で流されていないので、家はあるが、警戒区域のため帰れない。あまり足りないものはない。強いて言えば、下着と靴下。毎日替えるだけのものは支給されていない。
- ・車いすの人が多い印象。避難先から医療、薬の関係で戻ってきた人が多く、避難できない人が避難所にいるという感じ。



16 時頃：原町地区・石神第 1 小学校訪問

- ・ 3つめの避難所（原町地区・石神第 1 小学校）を訪問。
- ・ 入り口で、諏訪中央病院のグループに会う。医療に関しては、長崎のボランティアも入っているとのこと。
- ・ ここは、屋内退避解除後、多くの人に戻ってきたので、新たに再開した避難所。体育館だがゆったりとしている。診察室も場所が確保されている。
- ・ エコノミー症候群の予防のために、テレビを見ながら運動をしている。
- ・ (70 代ぐらいの女性)

運動をしなければと思い、今日から始めた。小高から避難。初めは市内の親戚、その後岩手の娘のところ、息子のところなど、転々としていた。お弁当はご飯がかたいという。



17 時過ぎ：南相馬市役所災害対策本部

- ・南相馬市役所。山口さんという生活？係の人に災害対策本部で話を聞く。
- ・今でも連絡が取れない市民がいる。たとえ、連絡をしてきても、なかなかきちんと対応ができないのが実情。一番の不满は、政府の決定のプロセスに参加できないこと。最初のころは、テレビで避難を知った。20 キロと言われても、そのような地図はなく、コンパスでひいて大体の対応をしていた状況。今回の計画的避難地域についても、40 分前に連絡があっただけ。南相馬市で計画的避難地域になったのは、山間部で世帯数も少ないところだから、計画的避難地域については問題がない。
- ・東電の関係については、市は関与していない。
- ・1 階に、東電関係者がブースを出して対応していた。なかなか市役所に来ることができない人もいるのでは、という話に対しては、できれば避難所について説明をしたので、それを市と協議中だという。

17 時半過ぎ：6 号線を北上し、仙台まで

- ・6 号線を北上して、仙台まで。6 号線の右は被害を受けて、何も無い。左はほとんど被害を受けていない。相馬市や宮城県では、がれきの撤去が進み更地のようになっている。時々がれきの集積場がある。沿岸すべてが被害にあっており、被害の甚大さを改めて感じた。

仙台・石巻（2011年5月6日－8日）

調査報告

ヒューマンライツ・ナウ

参加者：後藤、伊藤、田部、細井、西方、米川

大震災における人権の状況を把握し政策提言をするために、NGO 人権団体・ヒューマンライツ・ナウの調査で、仙台と石巻を訪ねた。現地の弁護士を通じて避難所を視察し、女性、高齢者や身体障がい者など弱者を支援する団体と面談した。

主な考察や問題

- 避難所の運営：男性が避難所の運営に関わり、外部者の訪問や運営の関与や、チラシの配布など情報へのアクセスを禁止・制限しているところが、特に宮城県で数多くある。このような「権力文化」は大震災後、家族や仕事を失った男性の多くに見られるのだが、それは男性が自身のアイデンティティやプライドを保つためだと考えられる。避難所の運営は各避難所に任せられ、自治体、校長、市議員等が担当しているが、PTA会長の息子である19歳の若者が、運営委員長になるケースもある。避難所の運営委員の政策（NGOの受け入れや在宅の被災者への支援など）によって、食事の献立、所内の雰囲気や被災者の表情が違ってくる。
- 女性のニーズ：どこの避難所でもDVの問題が浮き彫りにされた。避難所が主に男性によって運営されているため、女性の要請（仕切り、更衣室、女性の部屋、化粧品等）が単なる「わがまま」として受け入れられ、女性の声が出ることほとんどない。パープルホットライン（女性やシングルマザーのための安心ホットライン）による女性相談があっても、携帯電話やインターネットなどの通信手段が不足しているため、相談が制限されている。現地の女性団体は努力しているものの、中央政府からの支援や助言が必要とされる。（東日本大震災と阪神大震災の違いに関して、災害の面積や原発・津波の有無以外に、東北における男性の権力文化も挙げられるだろう。支援や復興のフェースにおいて女性の視点が強化されなければ、女性の犠牲者が増える一方であろう。）
- 身体障がい者のケア：高齢者などに比べると、障がい者へのケアや支援が行政によってされていない。バリアフリーの仮設住宅は多少つくられているものの、福祉避難所はないため、障がい者は彼ら用の施設に避難するしかない。
- 被災者のニーズの変化：大震災当初の被災者のニーズは食料、毛布やガソリン等であったが、2カ月経った現在は、春物の服、化粧品、洗濯機、雇用など変わっている。行政やNGO・NPOはその変化に合わせて、早急に対処すべきである。
- 行政とNGO・NPOの役割：衣食住など被災者への基本的な支援は行政が提供すべきで、NGO・NPOの活動は政策提言や行政ができない細かいサービスにとどまるべきで

ある。震災後、行政の機能が低下したものの、日本は破たん国家でなく、NGO・NPOによる炊き出しは、行政の「代行」をしているように映る。自衛隊による炊き出しも震災後 2 カ月経った現在も続いているが、行政や市民社会に任せるべきではないだろうか。

- 防災マネジメント：「想定外」の大震災とはいえ、地震・津波国の日本政府はもっと効率的に対処できたはずである。3月12日に、自衛隊やマスコミのヘリを視察の目的ではなく救助用に使用する、あるいは被災者への物資を輸送するために、民間のヘリを借り上げることもできたのではないか。
- パンの配布：大震災 6 週間以上経っても、朝食や昼食に菓子パンが配布されていたが、栄養面が懸念された。せめて普通の食パンを配布できないものか。

日程と面談の内容

2011年5月7日@仙台

10:30 被災女性の状況について

- ◆ NPO イコールネット仙台 代表理事 宗片恵美子
- ◆ [財] せんだい男女共同参画財団 総務企画係長 荒井康子
- 阪神大震災でも多くの女性が苦勞した。女性への支援に対する意識は高まっているが、そもそも女性の視点で地震を考えることはほとんどない。2003年の宮城地震を体験した女性に2008年に聞き取り調査をし、報告書にまとめた。
- 現在イコールネット仙台は、「洗濯ネット」というプロジェクトを行っている。避難所では洗濯機の設置がほとんどなく、女性の下着を洗濯しても外に干すことができないため、下着のほとんどは使い捨てでその数も限定されている。仙台市内の避難所 2 か所から本事務所に週 2 回洗濯物が届き、その運搬と洗濯に 200 人以上のボランティアが関与している。しかし、下着の洗濯を他人に預けるのに抵抗を持っている女性もいる。時間をかけながら被災者との信頼を築き、女性のニーズを調査する予定。
- 女性に関するダイヤル相談では、夫婦関連にする相談が 50%あり、DV が悪化したケースが多い。ダイヤル相談の広報が難しく、チラシ配布さえ受けつけない避難所もある。物資と一緒にチラシを渡すことならできるが、物資を避難所に送る前にロジ的な準備をしなければならず、難関である（洗濯ネットで洗濯物を返す時は、チラシを送ることができる）。被災者全員が携帯を持っているわけではなく、通信手段が限定されている。マスコミを活用し、相談の広報や働きかけを行っている。
- 避難所は自治体によって運営され、その権力によって情報まで管理される。避難所に入る前にかかなりのヒアリングがあり、地元の人でもアクセスがない。以前暴力団の出入りがあったようで、規制をするようになったらしい。「洗濯ネット」はたまたま知り合いの被災者がいたので始めることができた。

- 若い女性は要請を言わず我慢しており、授乳の場所もなく、化粧品は「ぜいたく品」と男性に受け止められている。仕切りがあっても使わないのは、男性が「一体感がなくなるから」と言うためである。女性は布団の中で着替え、男性への抵抗をだんだんあきらめるようになった。女性たちが沈黙させられている。
- 某市の避難所では自炊をすることになっているが女性だけが炊事当番を強制的に割り当てられ、男性は担当しなくてよい。女性たちは子育て、仕事があっても当番の際は一日中調理をさせられ、それが大変な負担となっている。調理ボランティアが欲しいと要請を出している。

(→ニーズを聞かずに避難所によって拒絶されてしまう。例えば、仕切りをつくる仕組み、あるいは役所が指導する仕組みをつくった方がいいのか?)

- 男女共同参画局に対応する自治体の男女共同参画課は小さい課であるため、女性の視点を伝えるのは難しい。避難所の区長に怒鳴り返されて通達について何も聞いてもらえなかったこともある。避難所内でフラワーアレンジメント、お話し会、交流会、サロンなど癒しの場をつくって、女性が自由に話しあうことにより、悩みごとを共有できれば相談に乗れるだろう。男性への支援のニーズもあるために、男性の料理教室を開こうとしたが運営側に断られた。

13 : 30

障がい者の置かれた状況について

- 被災地障害者センターみやぎ(1995年に設立) 代表 及川智
- 同上 副代表 杉山裕信
- 一般社団法人 日本福祉支援協会 大江正義
- 高齢者の名簿はあり行政からの支援は来るが、障害者の方には支援がされていない。
- 数多くの障害者は存在しているが、「プライバシー・個人の情報」が邪魔して、自治体が名簿を解除せず、本センターが助けたくても助けることができない。災害の際に、公開してほしい情報の基準を決めるべきである。
- 防災計画では企業との協定はあるが、障がい者との災害の協定はない。そのため、大震災直後には食糧やガソリンが障がい者に行き届かなかった。
- 避難所には障がい者は一人もいなく、実際に受け入れられない。
- 災害を想定して、政府は「福祉避難所」をつくることになっているはずだが、災害マニュアルには「つくるのが望ましい」としか明記されていない。
- 肢体不自由な女性。被災し、ショートステイから自宅に送り届けられたが、ライフラインがなくなったので真っ暗なところで取り残されてしまった。
4日間全く食糧供給も何も来なかった。夫がいたので夫も障害があるがなんとか面倒をみてくれた。夫がいなかったらどうにもならなかった。食べ物は夫がもらってきていた弁当を少しずつ食べていた。

- (なぜ避難所に行けないのか) 怖くていけない。どうせ嫌がられる。トイレも遠い。

15 : 15 杏友園 (身体障がい者療護施設)

- 生活支援課長 佐々木裕史氏
- この施設自体が津波にのまれるあと一步の所で、庭先まで水が来て止まった。
- しかし、再津波がある危険性があるということで避難することにした。
- 患者の方を高台まで避難させるのが大変。車でピストン輸送した。そこでしばらく待っていたでいた。大変だったと思う。近くの小学校に避難し、初日はベッドも持ち込み、また非常食を持って料理することもできた。最初は健常者も優しく見守っていた。しかし、自分たちは障がい者用に非常食をもって料理していたので、食事もなかった健常者の間に緊張感が生じ、2日が限界であった。寒さと食料の不足の中、「なぜ障がい者だけが温かい料理とベッドがあるのか」と視線が厳しくなった。
- もし避難所に長期間いた場合、そのの食事を食べるしかなかったが、ソフト食しか口にできない障がい者人もいるので、生存できたかどうか定かではない。だから、障がい者について普通の人と同じ食事にするわけにはいかないが、そうすると避難している人達が不満に思う。13日でもう限界で、14日の昼には全員帰ってきた。
- 障がい者は夜大きな声で奇声を出すなど、避難所では周辺に迷惑をかけるため、健常者との共生は難しい。また第三中学校という避難先は身障者用のトイレがないため、おむつが必要でない人も、おむつを着用していただくことで対応した。しかし、おむつをとり変えなければならない。公衆の面前でやることになる。しかも、なおいによって周辺に嫌がれるだろう。
- このように避難所で障がい者が暮らすのは困難である。
- 役場による、個別の障がい者の訪問は未だにできていない
- (質問) 福祉避難所が必要だと思うが、ここでは受け入れていないのか。
(答え) 老人ホームには収容人数を10%アップしてください、という話が来ている。こちらでも緊急ショートというかたちで、実際には滞在する方を数人受け入れている。塩釜市、多賀城市から「福祉避難所協定をむすびましょうか」という話がきていたが、津波の危険性もあったからお断りした。
- 今後また津波がきた場合、自分の施設がどうなるかもわからない。
- できれば食事の件がからむので、とにかく、福祉センターなど逃下場所を確保しておいた方がよい。障がい者のことを理解して下さるところに行くのが一番。
- 避難所を出てからは、電気がつかないので寒くて、毛布がいくらあっても足りないくらいだった。電池の備蓄、自家発電などで備える必要がある。
- 行政には、高台に逃げるための避難路の確保をしておいてほしいと思う。

17:00 サンピア仙台避難所（若林区） 運営委員長 早坂氏

ホテル形式の施設で、テレビやインターネットがあり、食事は弁当が出されていた。

[本避難所ではホテルのように個室があるため、プライバシーが保っている]

- 行政にお話しすることはない。不満な状態があれば、行政にお話ししている。
荒浜地域からきた。サンピアの第一次避難所三か所からの寄合である。町内が 5 つに分かれていた。
- 運営は、毎日 8 時から運営委員会を開催。市の人からの話を一本化して運営委員会で説明してもらい、いろいろなことを 20 人の運営委員が決める。そのなかに 6,7 名連絡委員がいて、決まったことを避難者に公平に伝達する。各階に連絡委員を設けて全員に伝達する。5 つの地域から来たのでそれぞれのリーダーの意見が違うので調整に難航する。
- 今一番心配は、住む家。仮設住宅。市役所におねがいしているけれども、一言でいうと遅いな、と思う。
- 施設の期限。いつまでと言う期限はないが早く移りたい。
現在「アスト長町」の仮設住宅の申し込みが始まっているが、被災した地域から遠いので、被災した地区から一番身近なところに仮設が出来たらそこに応募しようと考えている。コミュニティ申込みというのをやる予定。
近くに建設計画が進んでいる。アライ小学校跡地で 10 日以降に募集が始まるので応募を検討している。

18:30 六郷中学校避難所

[本避難所では、「コミュニケーションをスムーズに行うため」、仕切りは使用されていない。]

女性の更衣室が出来たが、山積みの食糧の横を通って体育館のステージの近くまで行く必要がある。

- [運営委員会の話] 大震災以降、塩害の被害がひどく、農業ができなくなり、失業である。また 60 歳以上の人を雇ってくれる企業もないため、これからの生活設定が心配である。

石巻調査報告（2011年5月7日）

* 石巻市の避難所の状況について

避難者数 8704名、避難所数 104（5/11 現在-詳細は添付の資料参照）。避難所は主に学校、コミュニティセンター、老人センター、寺社など。その他個人宅にも若干名。現在、物資の支給は順調。市役所本庁が水没したため初動態勢が遅れ、避難所は住民自らが設立。その影響が今も続き、良い意味でも悪い意味でも地域の特徴が避難所に反映されている（石巻だけのことではないが）。今回訪れた湊小学校の避難所は県外のボランティアが多数動員され開放的な雰囲気がある。開放的な避難所には多くの情報が集まり避難者にとって有意義であると思われるが、反面、2ヶ月経過した今、ボランティア頼りの復興のあり方に若干の危惧を感じる。ボランティアは石巻・専修大学のキャンパスに泊まり活動をしている。

* 石巻市 聞き取り調査の内容

■ 藤田利彦さん（コミュニティワーカー） 10:00

黄金浜にて被災。母、おばを亡くす。家が水没して3日間屋根の上で過ごす。地震のときは近所の人も皆生存していたが40分後の津波で多くの人が亡くなる。

- 12日に自衛隊とマスコミのヘリが来たが偵察と取材用だったらしく飛び去ってしまった。政府に大きな期待を持っていた被災者は、精神的ダメージを受けた。
- 同じ宮城県でも、多賀城には自衛隊基地があるのですぐに救助のゴムボートが出たが、石巻は取り残された。行政の大失態だと思う。
- 14日にやっと自分たちで救命した。水位が1.5mほどになったので屋根から降りて立ち泳ぎをして、渡波小学校に行ったが2メートル水没していて大変な状況。そこで、鹿妻小学校へ避難した。屋根の上にいる自分たちを助けに来た者はいなかった。田んぼに1000体くらいの死体が転がっていた。
- 14日に鹿妻小学校に行ってみると2000人の避難者がいたが、全く食糧がない。最初は、物資のせんべい1枚を1日家族4人で分け、10日目におにぎり1個を1日家族一世帯で分けた。
- 少ない食料をめぐるデマが飛び、奪い合いも生じた。この周辺のイオンは、万野倉中学校にすべての物資を運びだした。渡波小学校と鹿妻小学校が食糧がないのでわけてほしいと言ったら、「これは万野倉中学校のものでおまえたちのものでない」と教頭に言われた。ひどいと思った。
- 14日に石巻市の職員がやっときた。これまで何をしていたんだと聞いた。すると、石巻の市役所が水没し、自家発電動力を地下に持っていたので、機能停止したという。動力システムを地下に置くのはおかしいが、石巻は貧乏で市庁舎をたてられず貰い受けた

建物だからこういうことになった。

- 石巻市の幹部は、自然に水が吐けるとおもっていたが、13日も水没したままだったので、業者をよんだらポンプでくみだして、24時間かかる。それで、11日、12日は動けなかった。失態だ。13日に携帯電話でやり取りを始めたが、携帯がダウン。職員は、上からの指示がないので自分ではどうしたらよいか判断出来ず、待機していた、という。
- 14日、自衛隊が道路を開き、避難所の活動が始まった。→指示がないと何も出来ない公務員と指示がなくとも動ける民間人との差、自分たちで迅速に意思決定できる民間と、上の命令通りしか動けない公務員の大きな差が今回の災害で見られた。緊急事態では、迅速に決断を下す必要がある。
- ある避難所は最初学校の教師たちが運営管理をしていたが途中からPTA（「本部」と呼ばれている）が運営しており、その会長の息子（19）が運営委員長になっている、市の職員はいない。有事にもかかわらず、人の命を預かる重要な地位になぜ実務経験不足の子供を置くのか懸念している。
- 新興住宅地域は人間関係が希薄なため誰かがやってくれるだろうという意識が強く協調性に乏しい。反して繋がり強い地域はお祭りなどの行事を通じて「炊き出し」のシミュレーションも出来ており人間関係のコミュニケーションもとれている。
- NHKが「県外ボランティアは来るな」というメッセージを放映したために、当初は国際NGOなどが石巻入りをしなかった。石巻の行政の機能はもともと弱く、このような大災害のマネジメントに慣れていないために、NGOの存在があれば、状況が改善されていたかもしれない。
- 女性たちは春物の衣料品、化粧品などを必要としている。
- 漁業や農業だけでなく、商人に対する補償も必要。

■庄司かつ彦さん（弁護士） 11:00

- ・石巻市の高台に住む。津波はまぬがれたがライフラインが途絶える。
- ・浄水場に給水車が常駐していたので水をもらいに行く。
- ・当日は何も情報が入らず、翌日街が全滅しているとの噂を聞き、街を全ぼうできる場所に行ってみて、言葉を失うほどの衝撃を受ける。
- ・津波は川を上る。→川沿いの地域が全滅。
- ・ある場所では引き潮のとき海底が見えるほどだったという。→それほど大量の波が押し寄せた。
- ・石巻の産業の50%は魚の加工業。
- ・石巻市内はまだ支援が入っているが、沿岸部には援助が入っていないところもある。

■庄司慈明さん（湊小学校災害対策本部長） 14：00

自衛隊が1日2回炊き出ししている。チーム神戸が外部アクターの調整をし、ピースボートはその応援をしている。若者のボランティアが多いせいか、避難所の活気はあふれていた。

（避難所の概要）

- 以前避難民が1800名いたが、現在は238名のみで、5週間目に300名になったときに名簿がやっとなつていくことができた。
- 現在、避難所に残っているのは津波で家を失った者がほとんど。食事は朝食としてパンの配給。昼食、夕食は自衛隊の炊き出し。
- ボランティアのコーディネーターはチーム神戸&ピースボート。

（避難所の運営）

- 意思決定の方法は、町内ごとに決められた運営委員のミーティング（15人の運営委員）。男女を問わず要望は聞くようにしている。
- 避難所内外におけるコミュニティで重要している点は、平等と笑い。開放感を持たないといけなく、本避難所では様々なアクターや行事を受け入れている（ピースボート、自衛隊、JIM-NET、パキスタン人のヒューマニティというグループ等）。また一つ一つの達成感を大事にしている。
- 最初にみんなで避難所をきれいにする作業をしたが、これはよかった。避難所の校庭の表土は汚泥（石巻港のヘドロがまざる）。3月16日、「一つひとつの達成感が大切」と体育館の泥かきを始め、4日間かけてきれいにした。

（衣食住・医療などの供給）

- 最初、1100人に1リットルの水が4本のみ。3日間飲み物の支援なし。高齢者と赤ん坊のミルクを優先。4日目に、米軍の空母が石巻港に来て、おにぎりを300個配給。
- 医師会は4日目から活動。5、6日目には災害医療の活動が始まる。医療については、状況によって変化する。最初は救急医療が中心であったが、時間が経過するにつれ避難者の慢性疾患などの対応、現在はインフルエンザ等の伝染性の病気が心配される。避難所には高齢者もいたので介護が必要となる。介護対象者は15人。最初はチームを組み交代で介護するが、それも限界になった頃、高知から介護専門のボランティアが入る。施設へ移動するなど現在は1〜2人に減少。医療関係はどこでも進んでいるが、24時間ケア体制が必要とする介護の蓄積はあまりない。
- 電気も途絶えていたが東京から電源車が来る。通電のときは「通電式」を行う→さまざまなイベントを受け入れ単調にならないように努める。
- 被災者のニーズは時間の経過と共に変更している。医療の面において、救急→慢性→伝染。
- 自立するために各地域に拠点づくりをしてきたが、高齢者などが多いため拠点を維持することが困難。ボランティアの力を借りて配食を湊小で行う。

ここでは、避難所以外の自宅居住者のための食事の供給も行っている。

- 更衣室として図書館を使用。男女別に時間を決める。
(復興の課題)
- 現在必要なものはみんなが前を向いて生きていくことができるような国の政策。石巻は 12000 艘の船が流れた。金利負担軽減など、これまでのような復興対策ではダメ。船は本体が 2000 万円、設備機器が 2000 万円。再建するだけでも大変なローンを抱え込むことになる。国営化のような方針で臨むことが必要。
- やはり生まれた地域で生活していきたいとの希望がある。
- 仮設住宅の建設に関しても、中央政府は沿岸部での住宅の建設を反対しているが、山側では住宅に適した土地は限定されている。また漁業を営む人は沿岸部に住みたいと希望している。ゴルフ場を仮設住宅として利用できないのだろうか。

*聞き取りから見えること

- ・ 石巻市の市役所機能が働いてない。
- ・ 食料を高台に常備しておくなど津波に対する防災計画が出来ていなかったために、コンビニが襲撃されたり、住民同士の食料の奪い合いなどが生じている。
- ・ 港湾（海の中）には津波で流された瓦礫が残っているため港の復旧には膨大な費用が必要。
- ・ 被災者のニーズは時間の経過とともに変わっていく。それに対応した復興政策が必要。
- ・ 早急な都市計画の策定-国の支援のあり方が問われている。
- ・ 高齢者が非常に多いが、障害者の姿が見えない。障害者はどうしているのだろうか？また障害者だけでなく、震災孤児の消息など弱者救済のための施策がどうなっているのか気にかかる。一回の調査で判断することは非常に難しくフォローの必要性を感じる。

* 資料 写真



石巻・湊小学校 自衛隊の炊き出し



5月7日@石巻

街の一角に瓦礫の山が出来ている

* 資料-石巻市の避難所リスト(5/11 現在)

| 避難所名 | 避難者数 | 避難所 | 避難者数 | 避難所名 | 避難者数 | 避難所名 | 避難者数 |
|------------|------|-------------|------|----------|------|-----------|------|
| 中央公民館 | 128 | 図書館 | 52 | 大原中学校 | 15 | 大指林業センター | 31 |
| 飯野川中学校 | 200 | 山下中学校 | 98 | うしお荘 | 49 | 鹿妻小学校 | 282 |
| ヨークベニマル鹿妻店 | 20 | 洞源院 | 134 | 渡波公民館 | 20 | 小島佐藤宅 | 10 |
| 広瀬小学校 | 76 | NPO フェアトレード | 25 | 名振コミセン | 79 | 月浦(民家) | 40 |
| 萩浜小学校 | 132 | 法音寺 | 16 | 大須小学校 | 97 | 石巻北高校 | 97 |
| 蛭田中学校 | 190 | 船戸斎場 | 8 | 市役所本庁 | 6 | 阿部民石材店 | 9 |
| 小竹地区コミセン | 20 | 相川子育て支援センター | 136 | 名神自動遊園 | 17 | 牡鹿総合支所 | 58 |
| 法務局 | 5 | 東浜中学校区長宅 | 89 | 向陽地区コミセン | 62 | 小網個人宅3カ所 | 40 |
| 網小医院 | 4 | 門脇中学校 | 398 | 鮎川集会所 | 30 | 山下小学校 | 37 |
| 飯野川第一小学校 | 150 | 湊小学校 | 250 | 北上中学校 | 130 | 湊中学校 | 50 |
| 渡波保育所 | 35 | 旧水浜保育所 | 75 | 斎場 | 30 | 小泊(佐々木宅) | 28 |
| 梅溪寺 | 8 | 好文館高校 | 73 | ホテルドルフィン | 9 | 峰耕寺 | 55 |
| 石巻商業高校 | 24 | 遊楽館 | 88 | 創価学会平和会館 | 17 | 長渡開発センター | 1 |
| 清優館 | 137 | 住吉小学校 | 25 | 蛤浜集会所 | 22 | 勤労体育センター | 113 |
| 元 JA 渡波支店 | 45 | 中里小学校 | 100 | 渡波中学校 | 43 | 渡波小学校 | 360 |
| 萩浜中学校 | 45 | 味噌作 | 15 | 大須生活センター | 15 | 小積浜(民家) | 30 |
| 釜小学校 | 128 | 参道会館 | 11 | 稲井公民館 | 103 | 祥光寮 | 23 |
| 市立女子高 | 60 | 蛭田公民館 | 46 | 森林公園 | 40 | 桃生小学校 | 65 |
| 立浜龍澤寺 | 6 | 釜会館 | 19 | 石巻中学校 | 171 | 小淵個人宅19カ所 | 358 |
| はまぎく | 55 | 前網個人宅 | 24 | 法山寺幼稚園 | 15 | 白浜荘 | 42 |
| 泊コミセン | 159 | 石巻高校 | 164 | 市民の森駐車場 | 75 | 牧山社務所 | 23 |
| 根岸集会所 | 52 | 小室大室 | 61 | 青葉中学校 | 349 | 関北小学校 | 43 |
| 長尾生活センター | 19 | 稲井小学校 | 31 | 石巻特別支援学校 | 19 | 明友館 | 75 |

| | | | | | | | |
|------------|-----|-------|-----|--------|-----|----------|-----|
| 河北センター | 523 | 福貴浦会館 | 129 | 唐桑地区 | 31 | 住吉中学校 | 170 |
| 河南農村改善センター | 67 | 蛭田小学校 | 125 | 大街道小学校 | 168 | 十八成老人憩の家 | 139 |
| 祝田1区集会所 | 32 | ほたる | 30 | 万石浦中学校 | 157 | 給文個人宅3カ所 | 140 |

16:00 JEN

- 海外事業部 副部長 平野
- プログラムオフィサー 西村真由美
- 大震災後の1週間は仙台にいたが、ライフラインが破壊されただけの被災者が集まっており、彼らは数日後家に戻った。そのため、JENの活動基地をニーズが多い石巻に変更した。
- GW中、石巻専修大学のボランティアセンターとJEN本部を通して、1日100人のボランティアを受け入れた。今日は30人のみ。支援が届いていない「ホットスポット」となっている牡鹿半島で泥だしをしている。
- 石巻においてNGO・NPOの数は縮小しており、NPOとして石巻に活動しているのはJENのみ。他はピースボート等のボランティア団体。
- 炊き出しをきっかけに、コミュニティカフェ10か所をつくり、コミュニティ再生を行っている。カフェは映画鑑賞、マッサージといった、いこいの場となり、情報の提供の場（インターネット設備あり）となる。2013年までの2年間は、カフェ付近は新築が立てられなく、それまでの一時的な期間使う予定である。
- 被災者は乗用車を無くしたため、JENはコミュニティバスも提供する。コミュニティカフェと共に、地元の人によって運営してもらう。
- 商人の自立の支援をするために、商人の事業再開に関わる予定。
- JENは石巻の仮設住宅で生活用品は提供し、赤十字は電化製品が提供する。
- 避難所ではプライバシーは全くなく、弱者は我慢している。どのようにすれば弱者が声を上げることができるのか。臨床心理士はいるものの、被災者にいきなり核心の問題を聞くことはできず（被災者の中に表現できない人もいるため）、炊き出しや泥だしをしている。来週以降、女性や子供の臨床に関する講義を始める予定である。
- 生活の再建は土地の所有や都市計画とかかわっており、法的な救済はこれから何年にもわたって必要とされる。市役所でもなかなか相談されないこともあり、ニーズは多い。
- 被災者は車がないため、容易に移動ができなく、巡回式法律相談の可能性も考えられる。手続き、書類の書き方など基本的なものから教えることができるのでは？しかし弁護士が張り付きでなく、毎回人が変わっても混乱生じないか？
- 女性の空間も、女性相談も、また調整会議では女性の分科会もない。

17:00

ピースポート パートナー 小林深吾氏

- 避難所の運営の人柄によって、雰囲気が違う。避難所が在宅の被災者に支援するかどうかも決定できる。
- (質問) 在宅の人に避難所の食糧を配るところと配らないところがあるようだが、どうなっているのか。
(答え) 避難所の個々の判断にゆだねられている。在宅の人も、物資がもらえる人とそうでない人がいる。
- 石巻災害復興支援協議会はゆるやかな支援団体のネットワークであり、石巻市社会福祉協議会(石巻市民災害ボランティアセンター)は個人ボランティアで成り立っている。
- 役所は頑張っていると思うが、うまくいっていない。
- 行政は一つ一つの細かい相談に応じることができないため、法律相談のニーズはあり。2か月経って生活がある程度安定したが、それ以降仮設住宅に入り、課題が増えるだろう。
- 人権関連のNGOは石巻市内にない。
- 女性のニーズはたくさんある。仕切りもなく、男性が支配する文化があるため、女性は異論できない。縦割り社会が強いものの、「避難所文化」ができてしまっており、外部や上からの助言を受け付けなくなった。
- 早く仮設住宅に入りたい、というニーズが高い。
- (質問) 民間住宅を自力で探して住んでいる人にも家賃補助が出ることになっているが、避難している人は知っているのか。
(答え) 噂のレベル。実際に誰かがやってみないとみんな信用しない。
- 被災者の食事に関しては、1日1人1050円の補助金が支給されている。食事はおにぎりと炊き出し。市内の給食センター2か所が全壊されたが、栄養面を考えて、お弁当をつくる予定である。これから自衛隊がこなくなると、温かい食事を供給するのがとても大変になる。
- 炊き出しのコーディネーターができる人が不足している。市の産業部、自衛隊などができるが、それが課題だ。
- (質問) 被災していない給食センターで人を臨時採用して対応したりできないのか。⇒ 縦割り行政。給食センターは教育委員会がやる。
- (質問) 「なぜ、仕切りにしても食べ物にしても国の言うことが浸透しないのか」
(答え) 港小学校の立ち退きなど、行政の頭の固いのを目の当たりにしたので、役所に対する不信感があり、行政が上からものをいうことに反発する避難者が多い。既に2か月経過し、その間に行政に頼らない避難所の文化がそれぞれの避難所でできていて、独自にやるという考えが強化されている。一律に物事を決めるのに反発がある。

➤ 仙台調査報告（2011年5月8日）

5月8日 午前 医療の課題

坂総合病院 院長 今田隆一氏との話

【医療体制】

坂総合病院は、災害拠点病院となっている。災害拠点病院は、医療圏にひとつ県が指定する。

県が医療圏を決めるが、この地域の医療圏は、塩釜市、多賀城市、利府町、松島町、七ヶ浜町の二市三町である。医師会としては塩釜医師会に属している。

気仙沼、南三陸、石巻など被害の大きいところは県が直轄してやることとなり、災害コーディネーターとして石巻日赤の医師が常駐していた。

この地域は現状の体制でなんとかなったが、被害が甚大だった渡利町、山本町についても県がやるべきだったのではないか。

【避難所と救助の状況】

この地域では、多賀城と七ヶ浜、津波被害が大きかったため、避難所生活が続いている。長期間にわたって避難所が続くであろう。

塩釜、松島、利府町は、避難所はそろそろたたむ方向。松島は、東松島から避難された方が来ており、東松島市の復興とリンクしている。

七ヶ浜は、西武の高台住宅は残ったが、多くの家が浸水した。人間関係が濃厚な地域であり、「七ヶ浜ぐるりん号」という巡回バスを出して地域をつないできた土地柄。炊き出しもよくやっている。有名なシェフが炊き出しをするなど、自治体職員によれば、避難している方にメタボが心配なくらい、うまくいっているという。

一方、多賀城市については、指定避難所以外に、指定外避難所、そして「想定外避難所」（通常想定されない場所が避難所になった）など、一時避難所が三十か所くらいあったが、今では集約されて三か所になった。

そのうちのひとつが、多賀城市文化センターで問題がある。大きなメインホールと小さい部屋・半地下で構成されているが、管理者も目が行き届かない死角、怖いところがある。薄暗い通路に妊娠間もないシングルマザーが廊下のところに段ボールをかこって滞在するという状況が続いた。

絨毯のほこりがひどいのに、多賀城市が掃除をしない。

今年の三月は寒かった。室温、暖房管理がされていないために、非常に寒かった。

食事については、縦割り行政の弊害で、避難所の管理は対策本部だが、食料の調達は別の課が担当したため、外から支援物資として送られてきたものをわけて提供することしかやらず、災害救助法上の自治体としての食事提供を行わなかった。計算すると一日 1100 カロリーしかない。高齢者、妊婦、持病、糖尿病などの方には適切なカロリーを出さないとい

けないのに、そうした責任を果たさなかった。長い間おにぎりとパンにジュースで、温かいもの、加工したものは出ないという扱いで、最近ようやく改善された。

水は給水車がきていた。

このように、生活環境が問題。

災害救助法の不十分さが露呈した。

【医療支援】

津波被害：最初の三日で決まる。9日目に救出と言う事例は例外。

症状としては、低体温、津波によるけがなど。

病院に運ばれてきた患者さんは、そのほか、慢性疾患、透析ができない、糖尿病。在宅で酸素治療が必要なのに停電で治療が中断した方、開業医が被災して診察を受けられないので診察にきた方がいる。カルテと治療歴がわからないのが大変であった。

避難所への支援は13日に開始。外からの医療支援が来たのは12日である。民医連のネットワーク、ディーマット、ジェーマット、ピーキャットなどから応援が入り、1日100人、200人と医師が集まった。

349床のところを400床受け入れ、三交替を二交替にしたが大変であった。

各避難所に保健師が常駐し、医師も一日3回巡回に回るということをした。

3月14日に地域の病院と自治体によびかけて、関係者会議を開催し、議論をはじめた。これまで7回議論。7病院のうちひとつが被災したのでどう支援するか、救命救急のネットワークの再建、県との連絡調整、東松島市への支援をどうするかなどについて話し合ってきた。

往診内容については、三枚つづりの臨時のカルテをつくり、一枚は避難所、一枚は病院が保管、もう一枚を引継ぎのチームにつなぐ工夫をした。

今後の課題としては、1・ADL障害 介護的ニーズが高まっている。2・慢性疾患、3・集団生活感染症、4・夜間に発生する一次救急にどう対応するか、である。医療ニーズに応えるため、巡回バスを出して対応する必要がある。

さらに、心のケア、閉塞による健康悪化をどうするかも課題。

災害関連死は、病院として29例。震災関連死。そのなかに食糧事情のためにそうなった人がどの程度いるか。死亡するまでに至らなくても、肺炎になられた方には、ほこりの問題、栄養環境。心的ストレス。肺炎が増えた。

今後DV被害、性被害などもあると予想されるがまだ対応できていない。足浴をしながらお話しをうかがうことが一番である。

心のケアについてはプライバシーが保護できないから難しい。心のケアと言っても出てこない。

重層的な仕組み。ニーズに応える仕組みづくりが求められている。

【障がい者】

福祉施設は10パーセント増しで受け入れるようにという通達が出されたが、それでは十分

でなかったかもしれない。

高齢な障がい者については介護保険法でケアされているが、自立支援法の対象の比較的若い障がい者については自立支援法の問題が露呈した。

認知症の方などは避難所にいられないことになっただろう。介護職は処遇が低いというえ、スタッフが被災しても人員の手当てもされない。

この地域は精神科が少なく、脆弱な地域である。また、癲癇の患者さんについて処方ができなかったなど問題が多い。

【石巻について】

石巻については渡波、湊という小学校が避難所となり、学校が始まるということで避難所が立ち退きをするかどうか、ということでもめた。保護課と教育委員会の間の縦割りが事態を複雑にした。

子どもの教育と災害避難の問題についてどう考えるかは難しい問題である。湊小学校は出ていなくてもよくなったが、それで子どもの教育を受ける権利との関係はよかったのかという問題がある。また、二つの避難所とも再津波の危険性があり、再津波の危険性のある場所で救助を続けてよいのかという問題がある。

【災害救助法について】

自治体が災害救助としてやるべきことをやっていないのは問題であり、このようなことを繰り返さないために、生存権保障。健康権。食糧。住環境について、災害救助法にもっと具体的な規定を書き込む必要があるのではないか。食事や排泄、日常生活に最低限必要な健康維持の保障すら、実現しなかった。また、介護の保障は災害救助法に加えられるべき。憲法 25 条を保障するのが災害救助法だ、ということきちんと明文で規定する必要がある。また災害救助法では、赤十字社が医療に関して指定されているが、医療の公益性。災害時に赤十字社のみを指名している法律というのはおかしいのではないか。

厚生労働省の窓口負担免除の通達は 6 月までとされていて、阪神淡路より後退している。こうしたことを通達、通達でその都度決めているのもおかしい。

【その他復興について】

自治体機能の弱体のなかで災害を迎え、矛盾が露呈した。自治体のあり方を正面から反省すべき。また、災害救助において自治体が専門家とコラボレーションしていくことも重要。居住権を保障しなければならない。阪神淡路に比較しても避難生活が長期化しそうであるが、それを避けなければならない。そして再津波のことを考えれば、津波の危険のない安全な住居の確保が必要。沿岸部で住みつづきたいという住民もいるが、復興計画にあたっては安全性の確保とともに合意と納得が前提。

子どもの教育の保障。発達保障を十分に留意してほしい。

40%の医療機関が再開できずにいる。津波で病院が流されたところもある。医療の公共性を考えれば、開業医であってもそれは私的な損失ということではなく住民にとっての地域医療拠点の喪失である。医療を復活するために病院の再開を国が援助することが必要である。

5月8日 午後 多賀城市文化センター

避難所の課題

【避難所責任者からの話】

女性用の更衣室を設置した。

女性用の物資を配布するスペースも確保した。そのようにした理由は、女性が遠慮せずに必要な物資を受け取れるようにするため。支援にくる民間団体についても直接その部屋に来てもらう。

洗濯機、物干しスペースは確保したが十分でない。P&G による洗濯サービスを受け入れている。

【避難所の状況】

子どもの学習室あり

避難所の室内に仕切りはない。室内ではなく室外にマットを敷いて寝ている避難者もいる。施設の廊下の広いスペースを確保して段ボールの仕切りで囲っている世帯がある一方、教室の外の廊下の狭いスペースに、仕切りもなくマットを敷いて単身で寝る避難者もいる状態。管理者によれば、「室内に入るスペースはあるのでなるべく室内に入って寝るように勧めているが、一度落ちついた場所から離れたくないという避難者もいる。それに、教室のような集団のスペースの人間関係になじめず、一人で寝たいという人が、教室の外の廊下などで寝ている」という。

食事は仕出し弁当が支給されている。避難所外の人々にもこうした食糧は避難所で供給していたが、4月下旬で打ち切って現在では避難所外への食糧供給を断っているという。

以上